



情報誌

F A R

32 号

事務局：公益社団法人 日本放射線技術学会事務局内

〒600-8107 京都市下京区五条通新町東入東鋸屋町 167 ビューフォート五条烏丸 3F

TEL:075-354-8989 . FAX:075-352-2556 / http://www.jsrt.or.jp . Email:office@jsrt.or.jp

《ごあいさつ》

今年は平穏無事な年でありますように

会長 橋本 宏



新年明けましておめでとう御座います。

会員の皆様には、健やかに新年をお迎えのことと拝察いたします。

昨年 の 3 月 11 日の東日本大震災では、未曾有の大地震とそれに伴う大津波によって多くの方々が亡くなられたり、行方不明になられたりしました。心からお悔やみを申し上げます。

また、この災害に輪をかけたのが、福島第一原子力発電所の被災でした。燃料棒の溶融、使用済み燃料の温度制御不能、建屋の水素爆発等、想定外の事態が次々に起こり、原子炉は安全と言う神話はもろくも崩れ去りました。現地の福島だけではなく、遠く関東のほうまで放射性物質のヨードやセシウムが飛び散り、農業や水産業に携わる方々に多大の迷惑が及ぶだけではなく、小さなお子さんを持つお母さん方に限りない心配を与えてしまいました。少線量による人体への影響が、専門家の間でもはっきりしていないことから、説明の歯切れが悪かったり、意見が分かれたりするため、ますます不安が広がっているようです。

我々放射線、放射能に携わった者から見れば反応が強すぎるようにも思えますが、しかし、そのことを誰が批判できるのでしょうか。日本放射線技術学会も、春の大会は中止となり、インターネットでの発表となりました。

学会と時を同じくして開かれてきた FAR 会の懇親会も自粛せざるを得ませんでした。

このような状況の中で、唯一といって良いほど日本を明るくしてくれたのは、なでしこジャパンでした。

これまで無名であった彼女たちが、日本の、いや、世界が注目する舞台に踊り出しました。

この他のスポーツ界での話題は 4 年ぶりに日本人の大関が誕生したことでしょうか。

秋の懇親旅行は、FAR 会発足 10 周年ということもあって、記念懇親会が淡路島で盛大に開催されました。また、山田副会長を委員長に、記念誌の編集が企画され、四宮副会長を中心に編纂されて、10 周年にふさわしい素晴らしい記念誌が出来上がりました。同時に、FAR 会のシンボルマークも公募され、関係の皆様の投票の結果制定されました。

ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。春の懇親会は昨年と同じメンバーの方々が企画しているそうです。ご期待ください。

内 容

1. ごあいさつ 会長 橋本 宏
2. 2011 FAR 会懇親のタベ
3. 2011 FAR 会 淡路島を巡る旅報告 神澤良明
4. 会員動向
5. 会からのお知らせ
6. 特集「私のお薦め情報」
 - 1) 知 足 金尾啓右
 - 2) 知って見えてきたこと 木内繁夫
 - 3) 邯鄲の夢 喜多村道男
 - この生業にめぐり会う
 - 4) 植物達と Active ? に付き合って 雄川恭行
7. 佐々木先生を偲んで 有馬宏寧
- 大塚先生を偲んで 川上壽昭
- 柴田先生を偲んで 橋本 宏
8. JSRT 情報
9. 第 33 号の特集原稿募集
10. 連載《ご当地自慢 兵庫県三木市》 神澤良明
11. 編集後記 森 克彦

《2012 FAR 会懇親の夕べ》

桜の懇親会へのお誘い

世話人 石井 勉・藤田 透

平成 24 年度 FAR 会春の懇親の夕べのご案内をいたします。

昨年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の被害に遭われた方に心からお見舞い申し上げます。JRC2011 もその影響を受け WEB 開催となりました。今年は昨年中止になりました屋形船に再挑戦いたします。港横浜の海からの夜景を十分に満喫していただきたくよろしくお願いいたします。予算は昨年と変わらず 1 万円程度を覚悟して下さい。

海の幸の豪華な舟盛り、煮魚、数々の料理、屋形船の厨房で揚げる熱々、サクサクの天ぷらに舌つづみを打って下さい。各種のお酒も飲み放題です。

学会プログラムが確定していませんので多少の変更はご容赦下さい。決定しましたらご連絡をいたします。多数の参加をよろしくお願いいたします。

当日が快晴であること日夜祈っています。

開催日時：平成 24 年 4 月 14 日（土） 18 時 30 分ころから

屋形船屋：横浜・すずよし（www.tsujioka.com/suzu/）

乗 り 場：桜木町 駅前 ワシントンホテル裏

お問合せ：石井まで（Mail：tishi@med.nihon-u.ac.jp）



《2011 FAR 会報告》

2011 淡路島を巡る旅

世話人代表 神澤良明

第 39 回秋季学術大会は船橋正夫大会長、堀之内隆実行委員長のもと、神戸国際会議場で平成 23 年 10 月 28 日(金)～10 月 30 日(日)の日程で開催された。

会期の関係で旅行は 10 月 30 日(日曜日)～10 月 31 日(月曜日)に計画した。今回は FAR 会が発足して 10 周年でもあり、記念懇親会として位置づけられた。最終日が月曜日だということで多くの参加者は望めないと思っていたが、記念懇親会でもあり、できる限り多くの人に参加してもらいたいと思う世話人の呼びかけに 32 名(最終的には 31 名が参加)の申し込みがあった。

10 月 30 日(日)、出発当日はあいにくの雨模様であったが、船橋大会長はじめ実行委員会の皆さんに見送られ、実行委員会からビールを 3 ケース差し入れてもらって一路淡路島に向かって出発した。

最初の目的地は「花さじき」、甲子園球場の 4 倍の広さで一面コスモス、サルビアにいろどられた花畑である。遠く大阪湾を一望できるはずであったが、雨のため遠望は叶わず、雨に濡れたお花を見るだけで、その後、洲本温泉を目指した。

洲本温泉「夢海遊 淡路島」に到着後、記念懇親会までの時間は温泉を楽しんだ。

記念式典は物故者(設立以来 17 名)への黙とうから始まり、橋本会長挨拶、小倉明夫氏(来賓 JSRT 副代表理事)挨拶の後、山田副会長、川上副会長、四宮副会長から「10 周年記念事業を終えて」と題し経過報告があった。FAR 会シンボルマーク制作者前越氏、FAR 会懇親会皆勤の山氏、FAR 会情報誌連載功労の遠山氏に特別表彰が贈られた。



祝宴は代表世話人神澤良明の歓迎のことは、同じく地元神戸の垣鍔房穂氏の乾杯で始まった。料理の中心はやはり鯛、鳴門の潮でもまれた身の引き締まった鯛は絶品。料理も進む中、後藤氏(FAR 会発足時代代表世話人)、小倉氏(FAR 会名誉会員)、金尾氏、漢那氏、



飯田氏、伊藤氏、友光氏からスピーチがあった。スピーチの後は今回の目玉ビンゴゲームの始まりだ。全ての人に賞品を用意したが、気に入った賞品が手元に届いただろうか。

ビンゴゲームの提案者清水さんが前夜は緊張して眠れなかったという手品を、素人らしく和やかに披露された。祝宴の最後は山田先生提案の「高校三年生」の合唱で締めくくった。

幹事部屋での２次会でも大いに盛り上がり、あっという間に夜は過ぎた。

31日(月)、昨夜の雨がまだ残っているような曇り空、少し肌寒い朝 8 時にホテルを出発、鳴門海峡に向かった。あいにく大きな渦潮は発生していなかったが、鳴門海峡の潮は速く、まるで川の急流のようで、強い風の中、大鳴門橋のたもとまで進み海峡の潮の流れを体感した。9 時に開店した道の駅で少し土産を買い、一宮に向かった。

一宮では薫寿堂で線香の香りが満ちる工場見学と香作り体験を行った。理科の実験という感じで乳鉢に入れた香の原料を混ぜ合わせる。皆さん童心に返って、混ぜ合わせた香を粘土細工をしているように、薄く延ばし、好みの形に型抜きをし、それぞれ土産として持ち帰った。



次は、薫寿堂から車で 5 分ぐらいのところにある伊弉諾神宮に向かった。伊弉諾神宮は日本神話の国産み・神産みに登場する伊弉諾尊(イザナギ)、伊弉冉尊(イザナミ)を祀る。



伊弉諾尊、伊弉冉尊は天照御大神(アマテラスオオミカミ)のご両親で、伊弉諾神宮は日本最古の神社といわれる。駐車場に到着後、全員で大鳥居をくぐり、拝殿に向かった。拝殿に全員が着席し、橋本会長が記帳の後、東日本大震災の復興、日本放射線技術学会の発展を祈願した。拝殿では巫女さんが神楽を

舞い、荘厳な雰囲気身に置き、厳粛な儀式の中、清涼な風が体の中を吹き抜けたようであった。



日程の最後は昼食、昼食場所は淡路ハイウェイオアシスにあるレストラン・ポンテメールである。ここは月曜日が定休日であったが、無理を言って我々のためだけに店を開けてもらった。貸し切りである。大きな店内、非常にゆっくり、ワイン、ビールも美味しく、楽しい食事ができた。淡路ハイウェイオアシスには土産物を買える店もあるのだが、神戸空港に急ぐ人もあり、食事が終わってすぐにバスに乗り込み出発した。

通常のコースは交通渋滞があり、運転手さんの機転の利いた判断で少し遠回りをしたが時間通りに終点に帰ってきた。



FAR 会 10 周年記念懇親会「淡路島を巡る旅」にご参加の皆様、船橋大会長、堀之内実行委員長はじめ実行委員の皆様、お酒の差し入れをいただいた前田氏、飯田氏、多々無理を聞いて下さった日旅サービス山下さん、定休日にもかかわらず昼食を提供していただいたレストラン・ポンテメールさん、本当に多くの方にお世話になった。

幹事の清水さんは多くの人を誘っていただき、懇親会の企画等で今回の旅行で大活躍、不可欠な人でした。神戸大学病院川光氏は清水さんに誘われ非会員ながら参加され、カメラマンに徹して、多くの写真を残してくれた。藤田先生は適宜、貴重なアドバイスで、助けていただき、山田先生、山先生はご指導とお手伝いを願った。今回の旅行でご指導ご援助いただいた皆様に感謝申し上げ、FAR 会旅行が今後も継続されることを祈念して報告とする。

皆様ご苦勞様でした。来秋の FAR 会は関東になります。多数のご参加をお願いいたします。

《10周年記念事業・顛末報告書》

記念事業 世話人会（代表）山田勝彦

1. 主たる記念事業を終えて

FAR 会 10 周年記念事業は、平成 23 年 4 月の第 1 回役員会で協議した結果、この 10 年間の FAR 会の足跡を纏めた「設立 10 周年記念誌」の編纂と、「FAR 会のシンボルマーク」の制定に意見が一致しました。この記念事業については、会員の皆様と関係者の一方ならぬご協力、ご支援により、ここに二大事業を恙なく計画通り達成することが出来ました。そして「手作りの 10 周年記念誌」も 10 月末日をもって皆様のお手元にお届けすることが出来ました。

2. 記念事業の取進め経緯（企画から顛末まで）

- 1) 平成 23 年 4 月開催の第 1 回役員会に記念事業企画を提案し承認を得る。

FAR 会のシンボルマークの制定

FAR 会設立 10 周年記念誌の発行

- 2) 具体的な取進め計画

各部門における「依頼文案など」の作成、発送

平成 23 年 4 月末

シンボルマークの会員公募開始

平成 23 年 5 月 15 日

事業協賛募金の活動、広告依頼活動の開始

平成 23 年 5 月 15 日

シンボルマークの公募、原稿締切（含、広告申込み）

平成 23 年 6 月末日

記念誌の編集完了

平成 23 年 7 月中旬

印刷、製本、CD 作成

平成 23 年 9 月末

配布、発送完了

平成 23 年 10 月末

事業集約・顛末報告

平成 23 年 12 月末

3. 主要項目ごとの経緯内容

- 1) FAR 会シンボルマークの制定経緯

公募は 4 名から 10 点あり、運営委員会の予備選考を経て全世話人による本選考の結果、前越 久氏の応募作品が選ばれ、FAR 会のシンボルマークとして決定した。



- 2) 記念誌の編集、印刷、製本の作成経緯

記念誌は、A4 両面カラー印刷、本文 54 頁、中扉などを含めると 60 頁に纏める事が出来た。なお発行部数については、計画では 230 部（会員：100、賛助先：50、寄贈：30、予備：50）を予定したが、印刷、製本の全てを手作りで行うため、230 部を数回に分け京都近郊の FAR 会総務委員の方々、宮高局長を始めとした JSRT 事務局の方々のご協力により製本されたことをご報告申し上げます。

- 3) 10 周年記念協賛募金ならびに協賛広告の協力状況

FAR 会として初めて行った募金ならびに広告掲載であったが、その基本的な考え方は「FAR 会の殆どの収入は会員の年会費に依存し、その活動はボランティア活動に頼ってきた」。しかし今回の記念事業は 10 年に一度の企画であることから、会員に協賛募金をお願いし、また関係先企業に協賛広告をお願いすることとした。結果的には、会員からの協賛募金は、計画 30 名（60 口）に対して 65 名（246.5 口）の心温まるご協力を頂いた。さらに協賛広告については、計画 10 社（10 口）に対して 11 社（22 口）の御協力を頂き、当事者として改めて御礼申し上げます。

- 4) 記念事業の収支について

記念事業収支の最終報告については、平成 23 年度事業の中に含まれているため、平成 23 年度収支報告の中に「10 周年記念事業 収支明細」を含め、会計監査の受検を頂いたうえで平成 24 年度第 1 回役員会にご報告の予定です。

4、10周年記念懇親会

日時：平成 23 年 10 月 30 日 18:00～ 場所：夢海遊淡路島 参加者：31 名

【式典】司会・進行：山 総務委員長

開式に先立ち、FAR 会設立以来の会員物故者 17 名に対し、黙 禱をささげた。

橋本会長の「ご挨拶」に続き、JSRT 副代表の小倉理事より「ご祝辞」を頂き、また「10 周年記念事業を終えて」と題して副会長から報告した。

なお、10 周年記念特別表彰については次の 3 名の方が選ばれ、記念品が橋本会長より手渡された。

- (1)「FAR 会シンボルマーク・グッドデザイン賞」前越 久（名古屋市）

制作の狙い・コメント：「私は、FAR 会の一員であることに無上の喜びを感じています。このデザインは私が応募した 3 点の中の基となった作品でシンプルに“FAR 会の力強さ・太いつながり・絆”を表現したつもりです。」



- (2)「懇親会皆勤賞」山 哲男（京都市）

平成 14 年の「FAR 会発足記念懇親会」以降、18 回の懇親会の全てに出席されました。



- (3)「情報誌への執筆寄与 No 1 賞」遠山 坦彦（相模原市）

平成 13 年 9 月の創刊号発行以来、第 29 号 1 までの間、15 回も執筆頂きました。特に第 10 号～22 号までの特集“四国八十八ヶ所霊場巡り”は真似の出来ない行脚紀行文で、多くの会員に感動を与えられました。



【祝宴】司会・進行：神澤 代表世話人

“淡路島を巡る旅への歓迎のことば”が神澤世話人からあったのち、垣鍔房穂先生の音頭により杯を挙げ、楽しい祝宴が開会したが、その詳細は、本誌「2011 淡路島を巡る旅」の報告に委ねることとする。

5. むすび

10 年間の FAR 会の会員動向を振り返りますと、発会以来の延べ会員総数は、平成 23 年 5 月末現在で 141 名となります。この中には現在まで 15 名の方がご逝去、29 名の方が退会されておられます。でも発会以来今日まで、およそ 90～100 名の会員数を維持できたことは歴代の役員諸氏ならびに会員の皆様のお陰と感謝しています。

この度の記念事業の遂行に当たり、FAR 会会員の方々からの個人募金、並びに業界の方々からの協賛広告をお願い致しましたところ、多くの方々から多額の募金、広告を頂きました。このご好意に対しまして世話人一同より深甚なる謝意を表する次第でございます。そしてこの浄財はこの度の記念事業遂行に有効に使用させて頂きますと共に、FAR 会の今後の運営にも活用させて頂きたいと思っています。

この記念事業の遂行に当たりましては、熱いご支援を頂いた橋本 宏会長を始めとして、記念事業世話人、そして清水久子さんをはじめとした京都近辺の総務委員の方々、JSRT 宮高事務局長並びに事務局職員の方々のご協力により無事完了できたものと厚くお礼申し上げます。なおこの事業遂行に当たっては当初計画から事業完了に至るまで四宮恵次副会長の並々ならぬご努力のあったことを申し添え、ここに世話人を代表して改めて感謝申し上げ、ご報告とさせていただきます。

記念事業世話人：（代表）山田勝彦、川上寿昭、四宮恵次、山 哲男、前越 久、
山田和美、神澤良明、藤田 透、宮高 睦

~~~~~

## 会員動向

- 「会員数」 平成 23 年 11 月 30 日現在・・・97 名  
「新入会」 友光達志 岡山県倉敷市（8 月入会）  
「物故者」 柴田英三郎（平成 23 年 3 月ご逝去、享年 81 歳）  
佐々木正寿（平成 23 年 9 月 26 日ご逝去、享年 68 歳）  
大塚昭義（平成 23 年 10 月 5 日ご逝去、享年 73 歳）  
中間光雄（平成 23 年 11 月 9 日ご逝去、享年 93 歳）  
（尚、物故者は夫々死亡退会者として事務手続きを行った）

## 会からのお知らせ

平成 23 年度第 2 回役員会議報告（2011 年 10 月 30 日 神戸国際会議場 橋本会長以下 16 名）

1. 会務報告
2. 10 周年記念事業関係
  - 1) 本年 10 月に「FAR 会設立 10 周年記念誌」を発行し、11 月初旬に会員に頒布する。
  - 2) シンボルマークの制定 応募作品中、前越 久氏制作の作品を制定した。
  - 3) 10 周年記念特別表彰として下記 3 氏を表彰する。
    - ・前越 久「FAR 会シンボルマーク・グッドデザイン賞」
    - ・山 哲男「懇親会皆勤賞」
    - ・遠山坦彦「情報誌への執筆寄与 No. 1 賞」
3. 情報誌関係
  - 1) 第 32 号 発行予定：平成 24 年 1 月 15 日  
特集企画：担当 速水昭雄、テーマ：「私のお薦め情報」
  - 2) 第 33 号 発行予定：平成 24 年 5 月 15 日、原稿締切日：平成 24 年 4 月 15 日  
特集企画：担当候補 今井 方丈、テーマ：「私のひととき」
4. 懇親活動関係
  - 1) 「2012 懇親の夕べ」を下記要項で開催する。
    - 1) 代表世話人の選定：石井 勉、 2) 開催日時：平成 24 年 4 月 14 日（土）
    - 3) 場所：港横浜を屋形舟より海からの酒と肴を味わいながらの夜景を楽しむ
    - 4) 会費：9,000 円（会員補助 1,000 円/1 名） 非会員：10,000 円
  - 2) 「2012 〇〇への旅」の企画
    - 1) 代表世話人：山田和美
    - 2) 開催日時・場所・参加費等具体的事項は代表世話人と FAR 会懇親活動担当役員と協議の上、平成 24 年度第 1 回役員会議に提案する事とした。
5. その他
  - 1) 新入会員の勧誘の件を検討した。
  - 2) 平成 24 年度第 1 回役員会議：平成 24 年 4 月 14 日（土）パシフィコ横浜（予定）にて開催。

~~~~~

《特 集》

「私のお薦め情報」

第 32 号の特集のテーマを「私のお薦め情報」とさせていただきました。会員の皆様には、日頃取り組んでおられる仕事・日常生活・地元での行事・趣味などの中で、是非とも FAR 会の皆様にも知って欲しい情報・自慢したい情報・感激した情報・役立つ情報など必ず在ることと思います。そのようなお薦め情報をお願いいたしましたところ、4 人の会員から自分の人生にまつわる素敵な経験を通じての玉稿を寄稿していただきました。有り難うございました。

(特集企画 速水昭雄)

知 足

池田市 金尾啓右



私が、日本放射線技術学会の核医学分科会長に就任したのは 1991 年で、以後 10 年間この仕事をさせて頂きました。この学会の理事会に初めて出席した時のことが忘れられません。

理事会は、毎月 1 回、日曜日に、京都の地下鉄御池駅そばの貸しビルの一室で開催されており、この 5 階か 6 階だかの定例会議室は「知足」という名前でした。この文字を見た瞬間、私の脳裏を強くよぎったものがあったのです。それは、私が疎開中の出来事……。

昭和 19 年（1944）、第二次世界大戦での日本は敗色濃厚であった。当時私は板橋第 4 小学校 6 年生だったが、その夏、学童疎開が行われ、群馬県沼田市の舒林寺（じょりんじ）に集団疎開した。その後の毎日は、境内の清掃と読経と座禅、少しばかりの学習であった。

毎週日曜日になると、東京の家族、父兄などがぞくぞくと面会に来て、そのつど生徒たちは山を下って沼田駅まで、親を出迎えに行ったものである。が、私だけには半年の疎開期間中一度も両親が面会に来なかった。

毎日毎日それはひもじくて、飢えていたが、私を温かく気遣って下さる方も一人おられた。婦人会保母の深津さんである。そっと私に「誰にも言わないで、夜、いらっしゃい」と声をかけて下さり、私が夜の 8 時頃食堂に行くと、大きなどんぶりに「すいとん」を沢山入れて食べさせて下さった。何度も何度もお世話になりました。よっぽど「痩せこけた」私が哀れに見えたのであろう。飢えと淋しさに耐えかねて、頭痛という仮病も使った。皆が徒歩訓練で赤城山の麓まで散歩するという時である。

この時、一人の生徒が私に、家族から差し入れされたボン菓子の大きな袋を預けた。空腹に耐えかねた私は、一つ、また一つと口に入れ、彼らが散歩から帰ったときにはわずかに袋の片隅に残る程度に、それは減っていたのであった。

その日以後、私は冬の広い本堂で、炬燵に入れてもらえないという制裁を加えられた。本堂の片隅には大きな掘炬燵が 4～5 個並んでおり、生徒たちは 10 名ぐらいずつグループで暖まっていたのだが、私は一人、本堂のど真ん中で仏様に背を向けて正座し、前に「制裁」という地獄、後ろに「仏の慈悲」という極楽？と相対したのであった。つまり、赤城山から吹き下ろす、凍てつく寒さに震えながら、両手で両膝をせっせとこすって、寒さをしのぐ毎日が続いたのであった。風も山ほど湧いた。日向に出ると、学生服の襟元から背中にかけてゾロゾロと列を成して這い出てくる。血を吸って赤くなった腹が透けて見える。



畑のサツマイモも掘り起こして生のまま食べた。種子用のとうもろこしは、堅過ぎて到底歯が立たなかった「乾燥芋」は抜群にうまかった。農家の方たちが蒸した甘藷を筵に干している。私はそろりと手を伸ばして数個をすばやくポケットに入れて、あとから少しずつ食べた。本当にごめんなさい。

「足るを知る」「衣食足りてこそ礼節を知る」という諺を、身をもって学びました。

知って見えてきたこと

山形市 木内繁夫

FAR の会員の皆さんはこれまでレポート、論文、報告文などを書いてこられました。また、書くことを指導してこられました。日本の学校教育には文章指導のカリキュラムがありませんので、苦労されたことと思います。

今は卒業され、違った環境で生活しておられることでしょう。



それが今また、再び、文章指導の必要性が言われているようです。

最近、大学の基盤教育テキスト「なせば成る」(山形大学出版会、2010-1-15)の存在を知りました。残念ですが、街の書店で見ることにはできません。

書店の取り寄せか山形大学からの購入になります。

新入大学生のためのスタートアップセミナーテキスト。

学びの技法、プレゼンテーション技法、レポート技法などで構成されています。

主眼は文章の書き方。B-5版、75ページの小冊子です。

27ページの講師用「なさねば成らぬ」もあります。こちらは非売品。

私は、文章の目的は伝えること、理解されることにあると思います。

したがって、文章の基本は新聞記事や報告文であると信じています。

読む人を考え、伝えたいことを分かりやすく書く。事実と意見を峻別して書く。長じてレポートになり、論文になると信じています。

FARにはメーリングサービスがあります。そこでの言葉はツイートでしょうか、チャットでしょうか。私はそれぞれの違い、方法、作法を知りません。どなたか教えてください。

知らなかったことを知れば、得した気分になり、ちょっぴり幸せな気分になります。知って見えてくることもありますし、安心することもあります。

なかには、知ってわくわくすることもあります。

私は79歳、まだまだ知らないことがあります。その上、好奇心は旺盛です。脳みそはコチコチ、体はガタガタですが。



いまどきの新入大学生には「学ぶための基本」が必要なのだと知りました。大学生のための、学ぶための基本テキスト「なせば成る」。

ご一読をおすすめします。

かんたん

邯鄲の夢

.....この生業にめぐり会う.....

東京都 喜多村道男



あるきっかけで、この観世流の能にめぐりあった。ひとの生きざまを夢の中で矢のように過ごさせ、それを顧みさせて、感謝に満ちたため息をつかせる名曲である。

蘆生という蜀の国のひとりの年寄りが、人生について教を乞うために、楚の国の羊飛山に住む高僧を尋ね旅に出ます。その途中、邯鄲の里で宿をとります。その女主人が食事の支度ができるまで、この枕でひと休みするようにすすめます。蘆生が仮眠をとっていると、楚の国の帝王の位を譲ると言伝をもって勅使が現れます。そして、勅使に導かれ輿に乗ります。

やがて王位に就いて、千年の寿命を保つという酒を飲み、舞童による舞で祝福の日々を楽しみ豪華に明け暮れます。

宿の女主人の、「栗の飯が炊けた」という声に目を覚ました蘆生は、あの栄華を極めた歳月は飯の炊けるひとときの夢であったと知り、悟りをひらき故郷に帰ります。そして、この人生について感謝に満ちた気持ちを己に捧げるという物語である。

人類が放射線、放射性物質を手に入れ117年たった。アテネで第1回オリンピックが開催された翌々年でもある。このあいだ、放射性物質の利用に人類の叡智が集められ、限りない分野で役立ちその広がりは続いている。世の中、放射能だとか放射線だとかいうるつぼの中で騒がしい昨今でもあるが。

医科学への利用では、放射性物質をトレーサとして人体の多様な成分に目印として標識し人類のために役立ちはじめた。アイソトープ検査の息吹である。

定時制高校に通う 20 歳の春、新聞の二行広告を見つけた。東洋一の高層病院での洗濯夫募集であった。かくして新設の虎の門病院に潜りこむことができた。洗濯場から屋上に上がると東京タワーが半分くらい出来あがっていた。やがて白衣を着る放射線の助手となりアイソトープ検査にめぐり遇った。

ここでは、すべて夜学の時代であった。インビトロに関心があったので迷わず理学部化学科を選んだ。全部で 14 年間の夜学生生活が続いたことになる。

アイソトープ検査のはじめのころ、都内で数施設がこの検査を始めていた。ここでは、アイソトープ検査の研究会を立ち上げた。のちに、この東京核医学技術研究会は他地域の研究会と連携して日本核医学技術研究会となり 10 年を経て、日本核医学技術学会につながった。の学会も今年で第 31 回目を終えた。

ただの思いつきで 6, 7 枚の手書きの案内ハガキを東大病院などの見知らぬ人に通知したことから始まった。このときの案内ハガキ原稿が黄ばんで残っている。この研究会は願いどおりに続き 430 回を越えている。

36 歳のときの米国ジョーンズホプキンス大学核医学、米国立ブルックヘブン原子力研究所メデカルリサーチセンター (NY)、42 歳のときのカロリンスカメデカルセンター (Sweden Stockholm) の短期研修などに参加しこの生業に加速がついた。

やがて、後進の授業にも関わるようになった。趣味のヨットの話で関心をひきながら、全ての技術は人間愛だ、特に医療技術では人に優しい技術でなければならないなんて云いながら、この 35 年間に延べ 6 校の大学、専修学校で臨床検査技師 4320 人、診療放射線技師 2800 人、言語聴覚士 80 人で 7200 人のいわゆる教え子が、全国の何処かの病院などで白衣を着て患者さんの前でたち働いていることになる。それぞれの謝恩会で、晴々しく華やかに着飾った若者たちが手をつないでつくってくれたトンネルを握手をしながら通ってきた。決して白衣の乱用をしないようにと教えた言葉を忘れていないだろうね。

歳月は容赦ない。念ずれば通ずというが、念じてもかなわなかったことも多かった。何事も塞翁が馬のような気がする。垣間見にきた現世を、世間と身の丈の相互作用をもうしばらく旺盛にしよう。海馬傍回の委縮防止のために、なるべく高度の思考をもつようにして、できるだけ質素に暮らしたいと願っている。感謝に満ちた日々というべきだろう。

核医学にめぐり遇ったこの現世を矢のように過ごし、白衣を着て患者さんや学生の前立って 52 年も経った、この歳におよんで続いている。蘆生のような豪華に明け暮れた日々とは、ほど遠い現世の夢もそろそろだろう。

能 邯鄲
勅使に導かれ輿に乗る蘆生
邯鄲は、うす緑色をして秋にすんだ美しい声でなく虫の名でもある。



やがて、「粟の飯が炊けた」と女主人・・・ではなく、こんどは、常世（来世）から聞こえてくるのだろう。（帝京大学 在籍）

植物達と Active ? に付き合っ

大津市 雄川 恭行



FAR 会創立 10 周年の催し ” 淡路島の旅 ” では神澤先生はじめ世話人の皆様にお大変お世話になりました。その淡路島には 30 数年前の忘れられない思い出があります。

夏休みに小学生の子供二人を連れて訪れた淡路島では農業祭が催されていました。

現地の特産品が会場狭しと展示されていた光景は想像通り。びっくりは屋外に出て敷地に植えられていた 1 本のトマトでした。トマトは堂々として、まるで樹木。樹高凡そ 2 メートル、直径 3 メートル位もありました。その株にやや小型の赤い実が多分 200 個近くも、たわわにぶら下がっていたのです。「うーん・・・」子供のことを忘れて暫し、その場に立ちつくしました。傍には説明書きがあり、次のようなことが述べられていたのです。

「植物の成長には土中に含まれる肥料や水をはじめ成長を促進する物質が多く含まれています。一方、植物の成長を抑制・阻害する因子も土中に決して少なくはありません。このトマトは、その生育障害因子を取り除いた結果、このように生育したのです・・・」勿論、解説はもっと長く続いてはいましたが、憶えてはいないのでお許し下さい。この時以来「生育障害因子とは何？」という命題にとり憑かれたまま 35, 6 年

の歳月を空しくしました。

そして、そのことがまるで幻であったかのように、あの巨大トマトに匹敵するトマトには、妖として出会うことがなく、自分の中でミステリー化しています。

さて、驚異の効果を示す植物ホルモンには ジベレリン(ただし約 140 種類) オーキシシン サイトカイニン アブシジン酸 エチレン etc が知られています。そのうちジベレリンは生育促進作用が顕著であるという記述を読みました¹⁾。たまたま、庭に栗、いちぢく、葡萄の3種類、何れも2年物の幼木を各2本ずつ植えていましたので、それを試すには絶好の機会と、実行に移すことにしました。品種は、栗は異種交配のため「利平」と「銀寄せ」、いちぢくは共通で「イスラエル」、枇杷は2本とも「長崎早生」なのですが、果たしてジベレリン GA₄ 効果有や無しや? 好奇心で観察する日課でした。

勿論、効果判定が目的ですから2本のうち成長の遅い方にジベレリン GA₄ 溶液を今年3月に1回、4月に2回の計3回。根の周囲に施薬して春→夏→秋と成長を見守りました。

中間的判定

(1) 栗 = 樹高は両者とも 70cm→130cm に成長著しいながら、顕著な差異認められず

(2) いちぢく = 樹形はホルモン付与樹が非付与樹を 20cm 逆転 樹高 60cm→120cm

(3) 枇杷 = やや萎性だったホルモン剤付与樹が、順調に成長していた非付与樹を逆転 樹高 180cm、径もより太く遅くなり、予期以上の結果でした。このホルモン効果に味を占めて、無知を顧みず、今、あの巨大トマトを再来させたいと野望を抱く日々です

参考文献 塩井 祐三 et al「植物生理学」オーム社 1)p86~、芦原 坦/作原 正明「植物分子細胞生物学」日本植物学会 net. Etc



~~~~~

#### 《追悼》

#### 伊達気質の佐々木正寿さんを偲ぶ

有馬宏寧



昨年皆様を松島にお誘いした時、健康そのもので役者張りの風貌と声で少々腰を落としながら悠揚迫らずお世話した姿が、より一層松島の美を印象付けたのではないでしょう。

正寿君は同じ技師学校の11期後輩で、東北大学病院放射線部で14年間(私の退職まで)仕事をした間柄です。30代はじめに分院の統廃合で脳疾患検査のスペシャリストとして移ってきたのが出会いの始まりで、当時何か悩んでいる様子が垣間見え本人に問うたところ意外な答え、「部には無駄が多すぎ整理の手順と方法を考えている」とのことだった。さすが緊急患者の対応に精通した者の考え方は違っているとその時思い知らされたが、その後度々この件で相談を受けその頑固さに折れ「思うようにやって見たら」と今度は私からお願いした。おれ流いや正寿流(どうにか前にの精神と断・捨・離)は徐々に効果が表れた。

私の後任には当時部長で教授であられた坂本澄彦先生の推薦で正寿君にすんなりと決まり、その後11年間、大学の法人化、病院の機構改革・改称、診療技術部の発足、本学会の秋季大会長等、八面六臂の活躍で敢然として事に当たられたその手腕は見事であったと思います。

昨年11月、FAR会に「仙台・松島の旅」の報告を終えたと連絡を受け「近いうちに慰労会をやりましょう」とのことだったが、年が明け春を迎えても音沙汰なし。そしてあの東日本大震災が起き、直後に連絡が取れて「家族と家も無事で、後片付けが大変だ」と元気な声を耳にしてほっとした。3月末同門会員の被災確認で大学病院に出向いた際、技術部長の梁川功さん(仙台・秋季学術大会長)より正寿君が「昨年12月検診で胸部に異常陰影が見つかった、当院に検査入院し気管支鏡検査を受けたが悪性細胞は見つからず今後

「経過観察要」の身であることを知らされた。4月半ば再度うかがった際に「あれ以来検査に来ていない」と梁川さんは心配していたが、5月6月のCT/PETCT検査で、腫瘍は増大していて、肺がんの原発巣と考えられる遠隔転移も見つかり、6月20日に入院。化学療法・緩和放射線療法の併用で治療を続けていたが好転が見られず、容態は悪化の一途をたどり薬石の甲斐も無く、9月26日午前8時45分肺がんのために永眠された。享年67歳でした。

一度目の見舞いのとき「検査入院のとき画像診断をしてきていれば」と、初めて聞いた愚痴に非力さを詫げる気持ちで、ただ医療を信じると励ますしか出来なかった。二度目の時は医師と奥様の許しを得ての数分間の面会で、お互い無言のままそっと出した私の手を握り返してくれたのが最後の言葉と受け取った。翌日緩和病棟に移られ面会は出来なくなったからである。

この度の佐々木正寿君の訃音は正しく老少不定。年上の私を置いて何故先を急ぐのか、きっとあの世も金次第、浄化してから迎えに来るのだらう・・・私にはそのようにしか思えないのである。いつまでも気を使わず奥様と家族を見守れよ・・・そしてゆっくり休んでくれたまえ・・・正寿君長い間どうもありがとう・・・さようなら

合 掌

## 大塚昭義先生を偲んで

川上壽昭



本学会の進歩発展と技術学の向上に多大な貢献を果たしてこられました大塚昭義先生が平成23年10月5日に薬石効なく享年73歳で黄泉の国に旅立たれました。

仏典に「生者必滅 会者定離」とあることは承知していますが、知己を得て40年近くお互いを励ましあって頑張ってきた同年代の友との別れ、これほど辛く悲しく寂しいことはありません。

大塚昭義先生は、昭和34年に山口医科大学（現山口大学医学部附属病院）に就職され、日常の診療業務に専念される一方で平成2年には放射線部技師長として病院経営にも積極的に参加なさってこられました。

現役当時の先生は、研究活動にも熱心に取り組まれてきております。特にX線検査領域の研究では「いかに少ないX線量で最適な画像を描出するか」をテーマとした永遠の課題に取り組まれ、日本放射線技術学会を主体として100編以上の原著論文を投稿され、山口大学を全国トップレベルに引き上げてこられました。これらの数多くの業績を基に平成2年には「X線像の画質と患者被曝線量に関する統計学的研究」を主論文として立命館大学より学位を授与されております。このことは、臨床に携わる放射線技師として全国で初の快挙でありました。

更に、先生は昭和56年から30年間にわたり山口ゼミ（平成14年大塚ゼミに改称）を主宰され後継者の育成と放射線技術学の発展に多大な貢献を果たしてこられたと同時に本学会運営におきましても先生のお人柄と高い見識をもって長年にわたり代議員、評議員を務められた後、平成4年から平成13年まで理事にご就任されて学会の改革に積極的に取り組まれてきました。そして、平成13年から2年間、監事として学会の要職をお勤めされた後、平成15年からは編集委員長にご就任され、先生の手腕を遺憾なく発揮され今日の学会発展に大きく貢献されてきております。

このような、大塚先生の学術・教育及び運営面わたる輝かしいご活躍とご功績に対し昭和56年に瀬木賞、昭和57年に奨励賞、平成2年に梅谷賞をそして平成4年には学術賞を受賞なされております。

想いかえせば、先生の真摯なお人柄と、開拓者精神にあふれた積極性は、常に後に続くわれわれの指針でありました。どれだけ多くのものを譲り受けたか計り知れません。

然し 今や幽明境を異にせられたとは申しながら 先生の残されました偉大な業績は燦として輝き続け日本放射線技術学会会員17,000余名の今後の道標として将来を照らし続けるものと確信いたしております。

茲に、先生の御霊にいささかの弔辞を捧げ謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

やすらかに眠りください

合 掌

## “柴田英三郎 先生”を偲んで

橋本 宏



平成 23 年 11 月 25 日に学会事務局から「本日、ご子息より喪中はがきが届き、柴田英三郎先生が今年 3 月に亡くなられたことを知りました」との連絡を受けました。お互いに東京近辺に住んで居るにも関わらず、亡くなられたことを知らなかったことは誠に申し訳なく、ご家族の方々に改めてお悔み申し上げます。

先生と 1 年ほど前、お電話でお話した時はとてもお元気そうでした。こんなに早く逝かれるとは思っても居らず、又お会い出来るのを楽しみにしていましたが残念です。

思い起こせば、戦中、戦後の混乱期を同年代として経験し、放射線技術の発展のために活動した一人として、感無量の面持ちでございます。そして私が東京部会長時代には副部会長として随分とお世話になり深く感謝いたしております。更に技術学会には理事（1978）、監事（1988～9）として重責を全うされ、1999 年には学会功労賞が贈られたことをご披露して、改めて先生のご冥福をお祈り申し上げます。

合 掌

### 《JSRT 情報》

『第 68 回総会学術大会』大会テーマ：「未来への先導 - 放射線診療の核心に迫り未来を展望する - 」

大会長：土井 司（大阪大学医学部附属病院）

会 期：平成 24 年 4 月 12 日（木）～15 日（日）

会 場：パシフィコ横浜会議センター他

『第 40 回秋季学術大会』 大会テーマ：「Medical Science の一員としての心柱を求めて！」

大会長：保科 正夫（群馬県立県民健康科学大学）

会 期：平成 24 年 10 月 4 日（木）～6 日（土）

会 場：タワーホール船堀（東京都江戸川区）

### 《原稿・作品募集》

【第 33 号特集テーマに対する原稿募集】（5 月 15 日発行予定）

■□■□■□「私のひととき」□■□■□■

多くの人たちと関わりながら生きていく中で、自分だけの時間を持つことは思ったほど簡単ではありません。日々の生活では、どこかで環境の変化に応じてスイッチをきりかえなければなりません。そんなとき、ふっと自分だけの時間が欲しいときがあるのではないのでしょうか。

そのような気持ちについてお話いただければと思います。

（特集企画 今井 方丈）

### 記

原稿内容：副題（ご自由な題をお付けください。）

原稿文字数：800～1200 字（400 字原稿用紙で 2～3 枚程度）

写真：先生の写真（半身）及び内容に関わる写真を原稿に添えてお送りください。

写真はカラープリントまたは電子データいずれでも構いません。

原稿形式：手書き、ワープロ印字、メール添付など何でも結構です。

提出期限：4 月 15 日必着でお願いします。

送付先：今井 方丈 〒651-1112 神戸市北区鈴蘭台東町 4-2-35

Tel 078-592-5641 Mail [masatake@belle.shiga-med.ac.jp](mailto:masatake@belle.shiga-med.ac.jp)

## 《連 載》

### ご当地自慢『兵庫県 三木市』

三木市 神澤良明



ご当地自慢の原稿依頼があった。気安く引き受けたものの、自慢できるものはない。三木市に生まれ育ったが、成人して勤めたのが神戸大学病院、家は寝るだけであった。神戸のことを書こうとも思ったが、我が故郷三木を皆様に知っていただきたい気持ちで書くことにした。

#### 三木市の位置

学会事務所から家に帰るのに公共交通機関を使って約2時間30分かかる。東京より時間がかかる、「どこに住んで居るの？」と、聞かれる。今回は私の住んでいる場所の説明と、三木市の地場産業などを説明する。

三木市は東経135度の子午線の通る町。東と南を神戸市、北は三田市・小野市・加東市、西は加古川市に接している（右図）。

市街地は周りを山で囲まれた盆地で、美嚢(みのう)川の流れが三木の土地を潤している。気候は温暖で天災の少ない土地である。空気が美味しく、静かな町で、三木に帰ってくるとホッとする。これが自慢で、これ以外の自慢はほとんど無い。



#### 別所長治公

三木市の地場産業は金物で、それも大工道具が中心だ。この大工道具作りが発達したのには理由がある。それは戦国時代にさかのぼる。

天下統一を目指す織田信長は、天正5年（1577）に中国地方の毛利輝元を打つため、羽柴秀吉を総大将に任じ播磨に進行させた。

三木は別所氏が城を築き、東播磨8郡（今の加古川市、高砂市、明石市など三木の周辺都市）を治める地方都市として栄えていた。この別所長治を中心に播磨の武將は織田方に反旗を翻し、三木合戦へと発展していった。秀吉は、播磨の武將をまとめる別所氏との直接対決で、兵力が消耗することを避け、兵糧攻めで戦った。

別所方にとっては兵糧を確保する重要な戦であったが、そのたびに多くの武將と兵糧の搬入手段を失い、食料が尽きた城内の領民や兵は餓えに苦しみ悲惨な状況であったと伝わる。城主長治は領民の命を救うため、天正8年（1580）1月、一族とともに自刃し開城した。別所長治公は「今はただうらみもあらず諸人のいのちにかはる我身とおもへば」と辞世を残した。三木城址にこの歌碑があり、今も5月5日に遺徳を偲んで別所公春まつりが催されている。



秀吉は焼け野原となった三木の復興を考え、免税政策をとって四方に散らばった人びとを呼び戻した。復興のために集まった大工職人、その道具を作る鍛冶職人が次第に増え、三木の町も活気づき、復興が一段落すると、大工の仕事がなくなり、大工職人たちはやむなく京都、大阪などへ出稼ぎに行くようになった。そのときに大工が持参した道具の素晴らしさが評判になり、鍛冶の里三木としての地盤を固めた。そして現在に至るまで、伝

統の技を基礎として多くの優れた金物が開発・生産され続けている。

#### 三木の金物

三木の金物は大工道具が中心で、特に職人が使う本職用を多く作っている。今では建築工法も様変わりし

て、鋸、鉋などの大工道具もあまり使われなくなり、金物産業も衰退している。 市役所に特産品の展示を行っている場所があり、そこにこのようなパネルが展示してあった(前頁左図)。

三木金物のシンボルとして金物鷲(右図)がある。この金物鷲は見本市、展示会等で出展されている。金物鷲の中身は鋸や庖丁、ナイフ、ギムネ、鉋(なた)、手鉤(てかぎ)など総数にして約3,300点の三木金物製品だ。この鷲のオブジェは重さ1.5トン、翼長5m、高さ3.2mあり、ドイツで行われた見本市にも展示された。



#### 湯の山街道

湯の山街道は秀吉が三木合戦の時、三木から湯の山(有馬温泉)まで何回か作戦行動を起こしている。それ以来、「湯の山街道」と呼ばれ、徳川時代も参勤交代や西国からの湯治客が往来した街道である。この街道沿いには今でも卯建(うだつ)、虫籠窓(むしこまど)等のある立派な古い民家が残り一種独特の雰囲気を出している。

右の写真は卯建、虫籠窓のある家に鋸の看板があり、現在も金物商を営んでいる。



#### 山田錦

三木の特産品の一つに『山田錦』がある。粒が大きくて、そして精白にして歩留りがよいので、現在でも最高の酒造好適米である。『山田錦』の生産には朝夕は冷え込み、日中は気温が高い一日の気温の変化が大きい場所で、粘土質の田が適している。三木には山間部にこのような田が多く、全国一の『山田錦』の産地である。

#### ゴルフ場銀座

三木の北には中国自動車道、南には山陽自動車道が通り、3カ所のインターチェンジがある。自動車による交通の便がよいことからゴルフ場が多く作られ、現在、三木市には25の施設がある。Googleマップを見てゴルフ場の多さにビックリする。私の家からこれらのゴルフ場に30分以内で行くことができる。昭和7年にできた名門ゴルフ場の広野ゴルフ倶楽部も三木市にあり、これも自慢の一つである。

このようにあまり自慢もない三木市ですが、お近くに立ち寄られた折には、道案内ぐらいはできますのでご連絡下さい。

~~~~~

《編集後記》

東日本大震災及び台風12号による災害と日本の2011年は自然災害に見舞われ、国を上げての復旧・復興が求められた1年でした。FAR会員の皆様には、恙なく新年を迎えられたことと衷心よりお慶び申し上げます。2012年が素晴らしい年となりますよう昨年12月初旬に福寿草の苗を購入して鉢植えに見ました。

1月末から2月にかけて開花するので楽しみです。福寿草の花言葉は、「幸福」です。本年が、FAR会員・ご家族の皆様方に幸多きことを福寿草の写真に載せてお送り致します。



(森 克彦 記)

FAR 情報誌 No.32 (非売品)

発行日 平成24年1月15日
発行者 橋本 宏
編集委員会 山田和美(委員長)
石井 勉 伊藤博美
森 克彦
山田連絡先 Tel&Fax.04-7153-4559
Email:kazumi40yamada@nifty.com